

氏名	むら せ とし き 村 瀬 俊 樹
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 534 号
学位授与の日付	平 成 20 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	社 会 — 文 化 的 環 境 に お け る 子 ど も の 語 彙 獲 得

論文調査委員 (主査) 教授 藤田和生 教授 子安増生 准教授 板倉昭二

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、日本の子どもにおける初期の語彙獲得に関して、その社会—文化的環境の特徴を明らかにし、社会—文化的環境における活動において、子どもが語を用いて活動に参加することの発達過程と、アメリカの子どもと比較したときの日本の子どもの参加の仕方の特徴を明らかにしたものである。

第1章では、まず、これまでの語彙獲得研究では、生得的要因の検討、環境的要因の検討、Piagetの構成説を受けての語彙獲得への認知的基盤の検討がなされてきたことを論じ、本論では環境的要因に焦点を当てることを述べた。そして、子どもの語彙獲得に関する環境的要因として、これまでおもに検討されてきた養育者のことばの役割の研究について概観した。

まず、子どもの語彙獲得の個人差・獲得言語差に影響を与える要因としての養育者のことばの役割について、次に、養育者のことばを子どもがどのように認知的に処理しているのかという語の獲得の認知過程について、これまでの研究で明らかにされてきたことを述べた。そして、それらの研究では社会—文化的環境における子どもの適応行動としてのことばの使用という観点から不足しており、その観点からは何が検討されるべきと考えられるかについて論じた。すなわち、養育者のことばをはじめとして、子どもを取り巻く社会—文化的環境として提供されている言語的シンボルや画像的シンボルがどのような特徴を持つのかを明らかにすること、そして、それが養育者の信念とどのような関連性を持ち、一つの構造としてどのように理解するべきかを検討するべきであると論じた。さらに、社会—文化的環境における活動において、子どもと養育者が構成する発話連鎖に注目し、子どもと養育者が、それぞれどのような役割を果たしているのかを明らかにするべきだと論じた。すなわち、子どもが発話を遂行する先行文脈、子どもの発話が養育者に引き起こす行動、養育者が活動をどのように開始しようとするのかということについて明らかにするべきであると論じた。

第2章では、養育者のことばを取り上げ、日本の養育者の育児語の特徴と構造を、その使用の観点から明らかにした。その結果、日本の養育者の育児語には、擬音語擬態語の使用・音韻の反復、および、接頭辞や接尾辞の付与という二つの成分が考えられること、また、その二つの成分ともに、子どもの月齢の増大とともに、養育者の使用する度合いが減少することを明らかにした。

第3章では、養育者の育児語使用傾向が、養育者の信念とどのような関連性を持つのかを検討した。また、養育者の育児語使用傾向と養育者の絵本場面での会話スタイルとの関連性を調べた。まず、公共図書館が養育者向けに発行している絵本についてのガイド文書の内容から、日本の専門職者が絵本の読み聞かせに関して持つ信念を明らかにした。その結果、日本の文書では、アメリカの文書と比較して、絵本の読み聞かせについて、養育者と子どもの情緒的関係を重視していることが明らかとなった。

また、1歳半の子どもを持つ養育者に対する質問紙調査から、日本の養育者は、相互協調的社会化目標を背景として、子どもへの共感のことばかけを志向する傾向と関連して育児語を使用していること、また、育児語の使用は絵本の共感的読み聞かせスタイルおよび受容的読み聞かせスタイルと関連していることが明らかとなった。また、養育者の相互独立的社会化

目標を背景として、子どもに対する足場作りのことばかけを志向する傾向と関連して、音韻反復の形態を持つ育児語が使用されることが明らかとなった。

第4章では、養育者のことば以外の子どもにとっての社会—文化的環境として、絵本の内容に着目し、日本の絵本とアメリカの絵本で、画像的シンボル・言語的シンボルとして提供される絵やテキストにおいて、擬人化がなされている程度を検討した。その結果、日本の絵本の方がアメリカの絵本よりも、動物にも植物にも無生物にも擬人化がなされている程度が高いこと、動物・植物については、日米間の違いは、3歳以降の子ども向けの絵本よりも、3歳未満の子ども向け絵本においてより顕著に見られることが明らかとなった。

第5章では、社会—文化的環境における活動において、子どもがラベリングという言語行動で活動にどのように参加しているのかを検討した。絵本場面における母子の会話において、子どもがラベリングをするのはどのような先行発話文脈においてか、子どものラベリングに対して母親はどのように反応するのか、母親は会話をどのような方略で開始するのかを検討した。10ヶ月～27ヶ月児とその母子を対象とした横断研究により、子どもが母親の同一情報を先行文脈として、それを模倣するという形でラベリングをすることが月齢の増大とともに減少すること、子どものラベリングに対して、母親が精緻化情報提供や精緻化情報請求で反応することは子どもの月齢の増大とともに増大すること、母親は、子どもの月齢の増大とともに、会話の開始をラベリングによるものから情報請求によるものへと変化させることを明らかにした。

また、日本の母子とアメリカの母子を比較した結果、日米ともに、子どもの産出語彙数の増大に伴って、母親が子どものラベリングに対して精緻化情報請求を行う割合が増大するという共通性が見られた。一方、日本の母子は、母親のラベリングを子どもが模倣し、子どものラベリングに対して母親が問主観性の確認をするという発話連鎖をアメリカの母子よりも示す傾向が高く、アメリカの母子は、母親の情報請求を受けて子どもがラベリングをし、子どものラベリングに対して母親が精緻化情報請求をするという発話連鎖を日本の母子よりも示す傾向が高いという文化差があることを見出した。

第6章では、第5章で用いた絵本よりも複雑な絵本を用い、日本の母子を対象に、子どもが20ヶ月と27ヶ月の時点で、縦断的に絵本場面での母子による会話を分析した。その結果、母親は、子どもの月齢が20ヶ月から27ヶ月にかけて、会話の開始の仕方を情報提供から情報請求に変えること、子どもの情報提供に対する精緻的応答の仕方を精緻化情報提供から精緻化情報請求に変化させること、子どもの情報提供に対する模倣での応答を減少させることを明らかにした。また、20ヶ月時点で獲得語彙数が多い子どもの群では、母親の同一情報を模倣するという形での子どもの情報提供が20ヶ月から27ヶ月にかけて減少することを明らかにした。第5章の結果とあわせて、子どもが母親の模倣をして情報提供するという参加形態は、ある程度の言語能力を前提とした上でなされ、後に、言語能力の発達とともに減少する形態であると考えられた。

一方、20ヶ月時点で、母子がどのような発話連鎖パターンを示す傾向があるかということが、27ヶ月時点での子どもの産出語彙数や、27ヶ月時点で子どもがどのような先行文脈のもとで情報提供をする傾向があるかということに及ぼす影響については、明確な結果は示されなかった。

以上の研究結果から、第7章では、日本の子どもにとっての社会—文化的環境においては、養育者の育児語使用傾向と絵本の共感的・受容的読み聞かせスタイルが互いに関連性を持った構造として子どもに提供されており、それらは養育者の信念としての相互協調的社会化目標を背景とした共感のことばかけ志向によって基礎付けられていることが論じられた。また、言語的シンボルばかりでなく画像的シンボルにおいても、日本の絵本ではアメリカの絵本よりも擬人化が多くなされており、これは同様に共感性を志向することに基づいているものではないかということが論じられた。活動において子どもや母親の果たす役割についても、日本の母子は、共感と同一視に基づく社会化の滲み込みモデルと整合的な模倣と問主観性の確認による発話連鎖のパターンを示す傾向があった。これらのことから、日本の子どもにとっての社会文化的環境は、シンボルの提供においても、活動への参加形態においても、共感性に基づくものの果たす役割の大きいことが論じられた。

一方、音韻反復という育児語の形態は、養育者の相互独立的社会化目標を背景とした足場作りのことばかけ志向とも関連を示しており、活動における発話連鎖についても、母親は足場作り（状況を整えて援助すること）や賭け金を上げること（要求を次第に高めること）など、子どもの言語獲得を促す教示方略を用いているということが明らかになった。これらのことから、日本の子どもにとっての社会—文化的環境には、米国と共通の教示方略に基づくシンボルの提供と活動への参加形態もみられることが論じられた。

今後の課題として、日本の子どもたちにとっての社会・文化的環境が、子どもの言語発達、および、認知発達に及ぼす影響が、現時点では未解明であることが挙げられた。日本の子どもたちに対して提供されるシンボルが様々な対象の持つ知覚的特徴とともに示す相関関係が、子どもの認知過程においてどのように処理され、子どもの言語・認知発達にどのような影響を及ぼすのか、ある時点での子どもの活動への参加形態が、後の時点での子どもの活動への参加形態や子どもの言語発達・認知発達に及ぼす影響について明らかにするべきであることが論じられた。

論文審査の結果の要旨

言語はヒトが持つ顕著な特性の1つである。情報処理面から言えば、未だに満足のいく電子翻訳を許さない複雑無比の体系であるにもかかわらず、認知的には未成熟の幼児が、驚くべき速さでこれを習得していく。言語を獲得することにより、幼児はさらなる認知発達を遂げる。ヒトにとって言語は、獲得すべき目標であると同時に、さらに高次の認知活動を実現するための手段ともなっている。言語獲得は認知発達を理解する上で、最も重要な研究課題の1つである。

従来の言語発達研究では、子ども自身の言語行動の変化を記述することに重点が置かれていた。初語は何ヶ月齢、2語文は何ヶ月齢、何ヶ月で語彙数はいくつ、といった具合である。それに対し本研究は、子どもと養育者の相互交渉が、子の発達とともにどのように変化していくのか、またそれは文化によりどのように異なるのかを詳細に解析することから、子どもの言語発達を支援する社会的・文化的環境の効果を明らかにしようとしたものである。こうした手法と視点は論者独自のもので、言語発達を理解のみならず、認知の文化的多様性の理解にも、新たな資料を提供するものとして評価される。

論文は7章から成る。第1章では、従来の子どもの語彙獲得研究を概観し、そこには社会・文化的環境における適応行動としての言葉の使用という観点が欠落していることを指摘する。すなわち子どもという言語学習者を直接的に取り巻くインタラクティブな環境の分析が標的に据えられるべきことが論じられる。子どもは1人で言葉を覚えていくのではない。言語習得の場では、子どもと養育者の間に巧みな相互協応があり、それを詳細に分析しなければ適応行動としての言語獲得は理解できない。指摘されてみれば当然のことであった。炯眼といえよう。

第2章では、養育者の育児語の特徴と構造を分析し、擬音語・擬態語や反復、接尾辞がその主なものであり、使用頻度は子どもの月齢とともに減少することを示した。第3章では、日米で推奨されている、絵本の読み聞かせ法の比較研究から、日本ではより子どもと養育者の情緒的關係が重視されていることを明らかにした。また養育者の育児語使用傾向は子どもの発達に関する養育者の素朴な信念と関連し、子どもとの情緒的一体感を志向する養育者は育児語の使用が多いことを示した。これらは子どもの言語獲得における養育者の積極的な関与を示すもので、子どもが文化に適応していく初期過程の一端を示すものといえることができる。

第4章では、日米で最も読まれている絵本の内容を詳細に分析し、日本の絵本の方が、動物、植物、無生物、いずれをとっても擬人化の程度が高いことを示した。文化的差違は、養育者の働きかけ以外にも存在し、それが養育者の志向性とあいまって学習者の文化への適応を形作るのである。

第5章では、絵本を介した母子の会話を日米で比較した。日米ともに、子どもの語彙の増加に伴って、母親は子どもにより細かな情報の提供を求めるようになるが、日本の母子は、模倣と問主観性の確認の発話連鎖が米国に比べて多いことがわかった。また日本の子どもは、模倣から自発的ラベリングへの月齢に応じた変化がより顕著であることもわかった。このように母子の言語的相互交渉に見られる発話の調整のされ方に文化的差違があることは興味深い知見である。他方、第6章における日本人母子の相互交渉の変化を縦断的に検討した研究では、年長の子どもに対しては、母親は会話の開始を情報提供から情報請求に変えることもわかった。

第7章では研究成果をまとめ、日本の子どもにとっては、相互協調的自己感を背景とした情緒的一体感と関連して言語刺激の提供がなされており、社会化の「滲み込みモデル」に合った発話連鎖が生じるが、他方母親は情報請求などの子どもの言語獲得を促す教示方略をも同時に用いると結論している。こうした二重性により、子どもは日本の文化・社会に適応した言語技能を習得していくことを実証的に示した意義は大きい。

近年、文化によって心の働きは異なることが東洋・西洋を対比させる形でしばしば論じられる。しかしそうした異なる心が実際どのようにして形成されるのか、そのプロセスに関してはまだまだ研究は少ない。本論は、子どもを取り巻く言語的

環境，とりわけ養育者という応答的な言語的環境が，いかに子どもの社会的・文化的適応を形成していくのかを明らかにした研究として極めて重要な意義を持つ。質問紙調査，書籍調査，実験的観察に基づく資料を多変量解析やパス解析を用いて分析していくその研究手法は手堅く，かつ緻密である。おそらく見ただけで音を上げたくなるであろう大量の資料を着実に数値化していく論者の姿勢にも賞賛を惜しむべきではないだろう。

今後さらに望まれる点は，論者自身も指摘していることであるが，子どもの発達，とりわけ認知発達全般に，こうした言語発達をとりまく環境がどのような影響を及ぼすのかを解明することであろう。初段に述べたように，言語は子どもが獲得すべき目標であると同時に，さらに高次の認知活動を実現するための手段でもあるのだから。また，文化という総体の影響を取り出すことも重要だが，子どもの個別的家庭環境，養育者の育児方針，その他の多様な要因が，子どもの認知を具体的にどのように変えていくのか，こうした直接的な因果の検討も今後の大きな課題として残されているといえよう。しかしこれらは本論の価値をいささかも損なうものではなく，今後の研究のさらなる展開に期待すべきことである。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年11月29日，調査委員3名が本論文とそれに関連したことがらについて口頭試問をおこなった結果，合格と認めた。